2019年度　前期

個別学力検査

国　　語

注意事項

1. **試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。**
2. 問題冊子は26ページあります。解答冊子には解答用紙6枚が綴じられています。
3. 試験時間は90分間です。
4. **すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください(氏名は記入しないでください)。**
5. 問題冊子と解答冊子に印刷不鮮明や落丁などがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 試験中に気分が悪くなったときは、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
7. 問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。**ただし、無断で複写、複製、転載などを行うことはできません。**

個別学力検査

国語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語の解答はすべて解答用紙に書くこと。

第一節

じつは「同じ」にもいろいろある。本章で考えようとする「同じ」は、「時間的に変わらない」という意味での「同じ」である。この「同じ」こそが、近代社会を貫徹してきた。さらにそれが最終的に情報化社会を生み出す。というのは話を縮め過ぎなので、以下でもう少し丁寧に説明しようと思う。

ここまで扱ってきた「同じにする」というはたらきは、感覚所与(注1)についてだった。感覚所与は「違う」けれど、われわれは頭の中でそれを「同じにする」。あのリンゴとこのリンゴを比較して、要するにリンゴだろ、と「同じにする」。

本章の「同じ」はそれとは少し違う。「昨日の私と今日の私は違う」と言ったとする。ところが昨日の私はもういない。現在時点の感覚では捉えられない。つまり「昨日の私」は直接の感覚所与に［　i　］していない。だから「今日の私」と「昨日の私」を比べる時には、感覚所与で捉えられる「今日の私」と、捉えられない「昨日の私」を比べている。ところがこの二つを「比べる」ときに、そこには「同じ私」がすでに忍び込んでいる。だって「私」という「同じ対象」を比べているからである。そもそも全然違うものなら、比べようがないではないか。

絶対音感のところで、特定の振動数に対して、内耳の特定の部分が共振し、聴覚の一次中枢の特定の神経細胞が反応する、と説明した。この時に、「同じ」振動数の音に対して、内耳の膜の「同じ」部分が共振し、聴覚中枢の「同じ」神経細胞が活動する、といってもよかったのである。

この時の「同じ」は、自分の机とか、自分の箸とか、まさにそれ一つしかない特定の事物についていう。絶対音感という、やや奇妙に思われる表現は、その意味を含んでいる。たとえば私の箸は、それ一つしかないんだから、考えようによっては、唯一絶対である。

このように、「同じ」には基本的に違う使い方が二種類ある。「同じ特定のあるもの」という使い方と、複数のものを「同じにする」という使い方である。ここまで論じてきたのは、複数のものを「同じにする」はたらきである。これは感覚所与に関係している。本章で扱うのは、「昨日の私」と「今日の私」のように、特定の事物についていう「同じ」である。これは感覚所与ではなく、時間に関係している。ここから先の話は時間の話といってもいい。

第二節

鎌倉時代のはじめに『平家物語』と『方丈記』が成立している。この二つの書き出しは、どこか似ている。すべてのものは、時とともに移り行く。すなわち諸行無常である。要するにそう述べているからである。

個人的な好みだが、私は『方丈記』のボウトウ(い)が大好きである。鎌倉に生まれて育ったせいであろうか。［ii］つぶやきたくなる。

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし。

鴨川はいまでも京都の街を流れている。でも流れている水は常に違う。いわば鴨川(という名称または概念)は時間の中で止まっているのだが、その実質である水はひたすら入れ替わる。「世の中にある、人と栖と、またかくのごとし」。ヒトも街も同じですよ、と。

現代医学では、われわれの身体は七年で物質的には完全に入れ替わるという。それなら、私なんか、すでに十一回半入れ替わっている。鴨長明はむろんそんなことは知らない。でも八百年前にはすでにその本質を知っていた。われわれヒトも、要する

に鴨川でしょうが。いつも同じ自分であるようで、実質はじつは入れ替わっている。

平家物語はうたいだす。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり

祇園精舎は古代インドのお寺である。そこには無常堂という小屋がある。お坊さんが死を迎える時になると、この無常堂に移される。いまでいうホスピスであろう。無常堂の四隅には、玻璃(はり)の鐘が下げられている。(ろ)リンジュウになると、この鐘がひとりでに鳴りだす。諸行無常、是生滅法、生滅滅已(しょうめつめつい)、寂滅為楽、と。

本当にそういう音がするのか、そう聞こえるだけか、そんなことは私は知らない。無常堂に行ったことがない。

鐘の音はいつも同じである。強くたたけば、大きく鳴り、弱くたたけば、小さく鳴る。でも鐘は剛体で、鳴るのは固有振動をするからである。剛体の固有振動数は、その剛体の性質で決まっている。それなら個々の鐘の音はいつでも振動数が同じはずである。

じゃあ、なぜ諸行無常なのだ。同じ鐘の音でも、聴く側の気持ちがいつも違っているからであろう。というような変なことは、私くらいしか考えないかもしれない。だからどうでもいいのだが、古代インドの人は(は)ヨユウがあったんですねえ。こんな話を創ってみたりして。

第三節

西洋では諸行無常を古代ギリシャ時代に発見している。(注2)ヘラクレイトス学派の「万物流転」である。ギリシャ語ではパンタ・レイ(この世のすべてのものが、たえまなく変化している、の意)。ところがこの言葉はヘラクレイトスの時代から「同じ」である。実物はひたすら変化するけれども、言葉は変わらない。いつも同じである。(A)ここでも意識の持つ「同じにする」というはたらきが

貫徹している。言葉は意識が扱うものだからである。繰り返すが、「同じにする」というはたらきは、ヒトの意識の中にしか存在しない。

なぜ、私は私、同じ私なのか。もはや答えは明らかであろう。それは考えている私、意識の中の私だからである。身体そのものは、昨日と今日とで、決して同じではない。哲学でいう自己同一性、それは意識の持つ「同じだとするはたらき」そのものともいえる。今日の意識が、昨日の意識を指して、「同じ私」というからである。しかしその「私」を外部から科学的・客観的・物質的に、すなわち感覚を介して観察すれば、ひたすら変化を続けている。

意識は毎日、眠ることで定期的に失われる。でも生きている限り、毎日ふたたび戻ってくる。戻ってきた意識は「同じだとするはたらき」を含んでいる。だから(B)意識が戻ったらすぐに「同じ私」が戻ってしまう。

記憶があるから、同じ私なんでしょ。そうかなあ。

私自身も記憶を失ったことがある。正確には、ある時点から記憶が作られなくなった、というべきであろう。これを医学では一過性全健忘という。

第四節

新潟県新井のスキー場で、ゲレンデに出ていた時のことである。私はスキーがへたくそだから、インストラクターが付いて面倒をみてくれていた。家内と娘が先に(に)スベっていき、それを見送ったのを覚えている。その後がいけません。記憶がまったくないのである。ただ一つ、私がなにかインストラクターに質問をしていた。質問の内容は覚えていない。インストラクターは丁寧に答えてくれたが、むろんその答えも覚えていない。ただ覚えていることが一つだけある。

「だけど先生、さっきから同じことを何度も訊(き)いていますよ」

次はホテルの部屋になる。家内がいて、私が言っている。

「どうやら俺、記憶をなくしたらしい」

家内が言った。

「あなた、それ六度目よ」

記憶をなくしている間、私は私、同じ私だったのだろうか。そんなこと、覚えていない。当り前ですな。でも自分が記憶をなくした(新たに作られない)とわかっているんだから、「自分」はちゃんとあったわけで、それなら記憶と自分は別であろう。その自分とは「同じ私」だというしかない。だって記憶をなくす前とは別人だとは思っていないからである。「同じだとする」機能はなくなっていなかったのだと思う。

第五節

一過性全健忘の場合、失ったのは明らかに、比較的には短期の記憶の作成だけで、そもそもしゃべっているんだから、言語は失われていない。

言語は「同じだとする」という機能の典型だから、言語が残っているということは、「同じだとする」機能が残っていることを意味する。長期記憶も損(ア)なわれていないことは、家内を家内だと認識しているからわかる。

でもあれは奇妙な体験だった。あのままで生きていたら、どういうことになっただろうか。両側の海馬を手術で失い、そのために長期記憶しか残らなくなった、アメリカの患者H.M.の有名な記録がある。その人と同じことになったであろう。

数秒ほどのごく短期の記憶を作業記憶という。私の場合、直近のことには作業記憶のおかげできちんと反応はしているものの、記憶の連続性が失われているので、出来事自体は記憶に残っていない。あとからソウ(ほ)キしようとしても、記憶が作られなかった間の人生は消えてしまっている。

いったん言葉にすれば、それは永久に変化しない。デジカメのデータはいつまでたってもそのままである。いつでも「同じ」ポジ(注3)を作ることができる。

ネットの中の情報は、自分からひとりでに変化することはない。常に停止したままである。すなわち「同じ」である。時間的に変化しないもの、それを現代では「情報」と呼ぶ。情報が変わったように見えるのは、新しい情報が付け加わったり、(へ)キソンの情報をだれかが訂正したりするからである。付け加えても訂正しても、元の情報はじつはそのまま残っている。消去すれば消えるということは、元の情報が変化したことを意味していない。コピーをたくさん作っておけば、実質的に消せないのである。パソコンなら「ゴミ箱」フォルダーからデータを(と)ヒロってくればいい。

意識の中の私は、時間がたっても変わらないという意味で、「情報としての私」である。だからそれは「私は私、同じ私」である。

ところが実体としての私は諸行無常で、ひたすら移り変わる。それはたとえば身体の変化として、すでに述べたとおりである。社会を作るのは意識だから、社会的には私もあなたも「同じ私」として存在している。

自分がひたすら変化するからといって、「昨日金を借りたのは、今日の俺じゃない」と頑張ることはできない。自己同一性が諸行無常に頑固に抵抗するのは、こうした社会的な約束事の存在が大きいはずである。意識が創る社会の中では、自己同一性が優先する。

しかし個人に戻れば、(C)自分は諸行無常の「諸行」のほうだと気づく。

第六節

現在では、情報はついにデジタルになった。いまではすべてのテレビはデジタル・テレビである。

なぜデジタルなのだろうか。じつは「同じ」を突き詰めていくと、デジタルにならざるを得ない。デジタルとは、二進法、ゼロと一とで、すべてが記述されることである。さらにそのゼロと一で書かれた情報は、完全なコピーが作成できる。コピーとはつまり元のものと「同じ」ということで、同じものをきちんと作ろうとするなら、デジタルがもっとも望ましい。

ゼロと一だけでできたパタンをコピーするなら、間違いの可能性も実際的には最小限になる。人類はここで「元のものによく

似たコピー」ではなく、「理想的に同一であるもの」を手に入れることになった。デジタル・コピーとは、すなわち実現された「究極的な同じ」である。それに対して、アナログ・コピーはいわば(ち)ニセモノの「同じ」である。アナログ・コピーは、コピーを重ねるごとに劣化していく。最後にはオリジナルとは似ても似つかぬものになってしまうことすらある。

第七節

現代人はひたすら「同じ」を追求してきた。最初に生じたのは、身の回りに恒常的な環境を作ることである。部屋の中にいれば、いまでは終日明るさは［あ］しない。風は吹かない。温度は同じである。屋外に出れば、それが都市環境となる。都内の小学校の校庭はひたすら(り)ホソウされる。同じ堅さの、同じ平坦(へいたん)な地面、それを子どもに与える。べつに感覚を無視することを教えているつもりはないであろう。安全だとか、便利だとか、(イ)清潔だとか、その時々で適当な理由付けをする。でも一歩引いて見てみれば、やっていることは明らかである。感覚所与を限定し、意味と直結させ、あとは(ぬ)シャダンする。(D)世界を同じにしているのである。

いまでは若者は四六時中、スマホを見ている。その中にあるものはすべて同じものである。その意味は、放置しておけば、まったく変化しないもの、という意味である。それは諸行無常、パンタ・レイではない。現代社会、情報化社会は、もともとあった自然の世界に反抗して、諸行無常ではない世界を構築しつつある。しかもそれを［い］している現代人の多くは、それに気づいていない。

コンピュータの世界はどこまでも［う］する。いまでは学習もする。そのうち自分で自分より優秀なコンピュータを創るコンピュータが出てくる。そうなればだれもなにも考える必要すらない。コンピュータが全部やってくれるからである。

進歩？　そんなものは、私に任せておけ。コンピュータはそういう。諸行無常？　なんのことだ、それは。世界は永久に変わらないもので満ちている。千年前のあのデータ、あれはそのまま残っていますよ。こんなに確実な、安心で安全な世界はないじゃないですか。

第八節

ヒトはかならず死ぬ。それに気づいたヒトの意識は、それに反抗して、死なないものを創りたいのかもしれない。

コンピュータの中に現在の自分の記憶を含めた機能をすべて埋め込む。そうすれば、そこに自分が引っ越して、永久に生きることができる。でもその「私」とは、そもそもなにものか。そういうことを考える人は、自分をデータが詰まったパソコンだと思っているのではないだろうか。毎日少しずつ部品が入れ替わり、七年経つと、部品が全部入れ替わっているパソコンなんて、ありませんよ。

第九節

生物は遺伝子をアデニン、チミン、グアニン、シトシン、すなわちＡＴＧＣという四塩基で記述した。しかし脳が遺伝子を設計するなら、ゼロと一で記述するであろう。そこでは間違いの可能性が最小限となる。なにしろまったく「同じ」に、正しくコピーできるんですからね。ただしその世界では［　え　］は生じないことになろう。

しかもＤＮＡを［　お　］するこの四つの塩基は、はじめは自然界に存在するアミノ酸の種類数を記述するのに必要十分だと考えられた。しかし現在では遺伝子のほとんどは、タンパク質のアミノ酸配列を規定する構造遺伝子ではなく、いわゆるジャンクＤＮＡであり、しかもそれが真にジャンクつまり無意味であるかどうかすら、よくわからなくなった。ジャンクＤＮＡに機能があることも、知られ始めたからである。

そういうことになると、遺伝子という情報系は、ヒトの意識が構築するデジタル情報系よりも、はるかに多くの(ウ)剰余を含んでいることは明らかである。

それなら、デジタル化された情報が主流を占める現代社会は、数十億年を経て構築されてきた遺伝子情報系を持つ細胞に比較して、複雑なようでありながら、じつは徹底して単純化されているに違いない。

そして、現在のところ情報系には遺伝子系と神経系しかない。(エ)免疫系や内分泌系は遺伝子系の一部と見なしてよいからであ

る。二つしか例がないから、比較は難しいが、ヒトの脳という情報系が作ってきている世界は、細胞に比較して、単純すぎるであろうと私は推測している。だからこそ急激に「進歩」したに違いない。

第十節

自己同一性と社会の関係について整理しておこう。情報とは時間とともに変わらないものを指す。したがってもし自分を「同じ私」と規定するなら、それは「情報としての私」を意味している。それが生身の私と違うことは、じつはだれでも知っているはずである。しかし社会契約の上では、私は私、同じ私でなければならない。その場合、社会は私を情報として扱っている。

ある時、私は銀行に行った。ちょっとした手続きが必要だったからである。そうしたら「身分を証明するものはありませんか」と訊かれた。運転免許証または健康保険証がいるという。

私は運転免許を持っていない。病院に来たわけではないから、健康保険証も持たない。私は鎌倉生まれの鎌倉育ちで、銀行も年中行く。

銀行員は「わかっているんですけどね」という。私が本人だと知っているのである。

つまりそこで要求されていたのは、諸行無常である生身の私ではない。(E)情報としての私なのである。だからこそ免許証であり、保険証なのである。マイナンバーの評判が悪いことについては、個人情報を悪用されたらどうするとか、さまざまな理由があろう。でも根本は、生身の私と、情報としての私の折り合いが、まだ社会的に決着していないからではないか。

それならそれが究極的に折り合うかというと、どうかなあと私は思う。なぜなら現物の私は「見たらそれとわかる」だけでなく、臭いや音声、その他もろもろの感覚所与を含んでいる。しかし情報としての私を扱うなら、私が与える感覚所与の多くは「意味を持たない雑音」に過ぎない。その「意味を持たない雑音」の集合が生身の私だと、私自身は思っている。しかし社会的な組織の中では、そのほとんどはまさに雑音に過ぎないのである。

第十一節

マイナンバーのような問題は、社会システムの問題としてとらえるのが普通である。ここでは私はそういう視点をとっていない。ヒトの意識と感覚所与のいわば衝突と見なしているのである。

言いたいことは、両者の視点が必要だということであって、現在のところその一方、つまり社会システム的な視点が暗黙のうちに優先しているから「問題」が起こる。とくに官僚制は社会システムの典型だから、その論理に慣れてしまうと、ヒトのほとんどの性質は雑音になってしまう。しかしそのそれぞれの官僚自身が、私生活の上では、自分が(1)雑音の集合であることに気づくはずなのである。

それをなにより気づかせてくれるのが、自然であろう。自然とは森、川、海などばかりを指しているのではない。子どもや身体的な存在としての家族などを含んでいる。いわばそれに気づかせないために、ビルの中の部屋にこもり、明るさを一定にし、室温を一定に保ち、床を平坦で同じ堅さにし、無意味なものは一切置かないという形で、仕事場と称するものを作る。そこでこそ意識の「同じだとする」機能が最も有効になるからに違いない。

現代の若者たちが、実際にヒトに接するより、ＳＮＳに接するほうを好むのも、このことに関係していると私は思う。「超ソロ社会」も同じである。「超ソロ社会」とは荒川和久氏の著作のタイトル（『超ソロ社会――「独身大国・日本」の衝撃』〈ＰＨＰ新書〉）だが、要するに一人暮らし、独身者の急増を示している。

なにしろ結婚しない。生身のヒトはいわば「雑音を含み過ぎている」。意味を持たない、さまざまな性質が生身には含まれてしまう。そんなものはいらない、面倒くさい。ノイズと結婚する気なんかない。小さい時から、安心安全を旨として、できるだけ恒常的な環境に置いて子どもを育てるのだから、そうなって当然であろう。学校には雑音は禁物である。こうした現代生活は人生の意味を(オ)剝奪しているのではない。むしろ「意味しか存在しない」社会を作っている。それが情報化社会である。(2)情報とはすなわち意味でもあるからである。

第十二節

情報は時間とともに変化することはない。でも時間とともに変化するものを、扱わなければならない場合は数多い。生物学でいうなら、進化学、発生学がそうであろう。文科系なら歴史学が典型である。

池田清彦は、科学とは「変なるものを不変なるものでコードすること」だと述べた。これはじつは科学に限らず、時間を含む過程を記述するときに、どうしても生じてしまうことである。

たとえば運動という言葉を使うとしよう。実際の運動はまさに時間とともに動く過程である。しかし運動という言葉、あるいは概念は、それを止めてしまっている。だからここでの根本的な問題は、時間を含む過程を、本質的に時間を含まない情報に、どう変換するのか、である。

むろん単語については、右に例示したように、時間を含む概念として、それはすでに成立してしまっている。それが当然になっているから、単語から文章になっても同じこと、時間を含んだ記述が成立するのは当然だ、という［ iii ］の前提が生じる。池田はあらためてそこに問題があることに気づいたから、右のように述べたに違いない。単語つまり［ iv ］なら当然だが、それは時間そのものを意識する事柄の記述についても当てはまるのか。現代分子生物学は時間をいわば抜くことで成立している「近似真理」だと米本昌平はいう(注4)(『ニュートン主義の罠』書籍工房早山)。

そもそもなぜそんな「変換」が必要なのか。つまりそれは、なにかを「記述する」こと自体の問題である。記述しさえしなければ、時間は勝手に流れて行き、それはそれで仕方がない。ところが意識はそれを記述しようとする。ファウスト博士(注5)は悪魔メフィストフェレスと契約を交わす。その中に「時よ止まれ」と言ったら、魂は悪魔のものになるということが含まれていた。これはなかなか［ v ］なのである。

時間と空間すなわち時空は、意識が創り出した、基本的な概念の一つである。このことはすでに『唯脳論』(ちくま学芸文庫)で書いたことがある。

時空とは、時間を内在する聴覚運動系と、時間を内在しない視覚系を折り合わせるために、意識の内部に発生した。その際の

説明の好例として、ゼノン(注6)の逆理を挙げておいた。ここではもちろん、運動系と視覚系とがまだ折り合っていない。

さらにはハイゼンベルク(注7)の不確定性原理も、よく似た面を持っていることも指摘した。素粒子の位置を測定すると運動量(時間tを含む)が測れず、運動量を測ると、位置が決められない。

ここでも再び、感覚系と意識、末梢と中枢という問題が顔を出す。ヒトの意識が生じたとき、視覚と聴覚がすでに存在していた。ところが連合野はそれを連結しなければならない。光電管を使った機械で情報を集めている技術者と、音波を使って情報を集めている技術者が、話し合いに入ったとしよう。二人のデータを組み合わせて、一つの見方でくくりたい。そういう相談である。ここでどうしても時空が発生するはずだ、ということになる。

第十三節

時間と空間は、ヒトの意識とは無関係に、宇宙の始まりからあった。そう考えられてしまうと、私の議論は意味をなさなくなる。そうではなくて、ヒトが時空に気づいたのは、現在のホモ・サピエンスの意識が発生してからでしょ、と言いたいのである。そもそも意識がなかったら、時空もないのは当然である。しかし仮に初めから時空が存在したとしても、それにヒトの意識がどう「気づいたか」は問題になるはずである。

概念としての時空はヒトの意識とともに、あらためて発生した。時空はふつう先験的、アプリオリである。だからカント(注8)はそう述べた。でもそれはあくまでも意識のせいであって、目と耳を折り合わせ、言葉を作らなければ、あたりまえだが時空(という概念)は発生しない。カントは哲学者で、哲学者はとりあえず言葉だけを使う。それなら言葉の前提である目と耳の共通処理から時空が発生するというしかない。

現にわれわれが生きている時間とはなにか。それは一期一会であろう。ただいま現在である。過去はすでに済んでしまっているし、未来はまだ来ていない。確実な時とは、ただいま現在しかない。

現代人の考える未来とは「予定された未来」すなわち手帳の中身のことだと、かつて述べたことがある。明日の予定が決まって

いれば、それはただいま現在を拘束する。明日名古屋で講演の約束があれば、今日ハワイに行ってしまうわけにはいかない。それなら未来の予定は現在の私を拘束している。

過去も同じように現在の私を拘束する。三十年前から勤めてるんだから、いまさら仕方がないだろ、ということになる。それならその三十年は現在というしかない。現在の私を拘束しない過去と未来は存在しない。意識はそういうものがあると主張して、だから歴史の勉強をしなければならないし、約束は守らなければならないという。

私の知り合いの虫屋は「靖国神社は戦後にできたんですか」と私に聞いた。五十代で、子どもたちはもう大学を卒業している人ですよ。靖国神社がいつできたのか、そんなことは彼の意識にはない。彼の人生になんの関係もないからである。

われわれが保有している時間は、ただいま現在だけだが、意識は偉いから、過去も未来も存在するという。それはどこにあるかって、頭の中にあるとしか言いようがない。(F)それが現在を拘束するときにだけ、過去も未来もただいま現在に顔を出す。

（養老孟司『遺言。』をもとに作成）

（注）

1　感覚所与――人間の感覚器官が外界の刺激を受け取った時の第一印象のような知覚。

2　ヘラクレイトス――古代ギリシャの哲学者（紀元前五四〇頃～前四八〇頃）。

3　ポジ――positive の略語。ここでは映像や写真のフィルム・ポジの意味。

4　米本昌平――元総合研究大学院大学教授（一九四六～）。専門領域は科学史・科学論。

5　ファウスト博士――ドイツの文学者ゲーテ（一七四九～一八三二）の悲劇『ファウスト』の主たる登場人物。悪魔メフィストフェレスと契約を結んだ後を筋立て、人間の行為を肯定的に描いた。

6　ゼノンの逆理――ゼノンは古代ギリシャのエレア派の哲学者（紀元前四九五頃～前四三〇頃）。逆理は、逆説、パラドックスのこと。

7　ハイゼンベルク――ヴェルナー・カール・ハイゼンベルク（一九〇一～一九七六）。ドイツの物理学者。

8　カント――イマヌエル・カント（一七二四～一八〇四）。ドイツの哲学者。

問題Ⅰ　次の問いに答えなさい。（配点20点）

問一　傍線部㋐～㋔の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

㋐　損なわれて　　㋑　清潔　　㋒　剰余　　㋓　免疫　　㋔　剝奪

問二　傍線部㋑～㋛のカタカナを漢字で書きなさい。

㋑　ボウトウ　　㋺　リンジュウ　　㋩　ヨユウ　　㋥　スベって　　㋭　ソウキ

㋬　キソン　　㋮　ヒロって　　㋯　ニセモノ　　㋰　ホソウ　　㋱　シャダン

問三 空欄 [i] ～ [v] に入る最も適当なものを、それぞれの選択肢(1)～(5)から一つずつ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

[i]
(1) 基幹　(2) 帰依　(3) 追従　(4) 立脚　(5) 終始

[ii]
(1) 幅を利かせて　(2) 内を外にして　(3) 折に触れて　(4) 矛を収めて　(5) 郷に従って

[iii]
(1) 随意　(2) 暗黙　(3) 未詳　(4) 架空　(5) 有為

[iv]
(1) 専念　(2) 観念　(3) 一念　(4) 思念　(5) 概念

[v]
(1) 以心伝心　(2) 主客転倒　(3) 大同小異　(4) 意味深長　(5) 枝葉末節

問題Ⅱ

次の問いに答えなさい。なお、論述形式の問いでは、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。（配点55点）

問一 空欄 **あ** ～ **お** に入る最も適当なものを、次の(1)～(6)から一つずつ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。なお、同じ選択肢を複数回選んではいけません。

(1) 推進　(2) 進化　(3) 能力　(4) 構成　(5) 変化　(6) 発展

問二 波線部(A)「ここでも意識の持つ『同じにする』というはたらきが貫徹している。」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1) ヒトは、意識の創り出す社会の中で滞りなく生活するために、同じ表記をもつ特定の言葉を、その意味をさまざま使い分けながら用い続けるということ。

(2) ヒトは、特別な機能を持つ意識によって言葉をも扱うことで、その意味を変えずに、同じ言葉を用い続けるということ。

(3) ヒトは、同じ音を持つ言葉を耳で聞く場合に、その時の気持ちがどのようであっても、絶対音感という意識をはたらかせて諸行無常の響きを耳で捉えるということ。

(4) ヒトは、東洋の「諸行無常」という言葉と、西洋の「パンタ・レイ」という言葉とを比べて、要するに同じ由来を持つ言葉なのだと意識するということ。

(5) ヒトは、ヘラクレイトスが死んでいることを意識しながら、あたかも現代に生きているかのようにその言葉を記憶にとどめるということ。

問三　波線部Ⓑ「意識が戻ったらすぐに『同じ私』が戻ってしまう」とある。それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　「意識が戻った後の私」の氏名という言葉は、「意識を失う前の私」の氏名という言葉と同じである。言葉は意識が扱うものなので、意識の中で氏名が同じ二つの私は同一人物として扱われるから。

(2)　「意識を失う前の私」と「意識が戻った後の私」とが別人だと扱うと、社会の中で約束事が守られにくくなってしまう。そこで二つの私を同じにするという社会的規範が存在するから。

(3)　感覚を介して観察された「私」は、意識を失う前後で異なっている。しかし意識の中で、私は「意識が戻った後の私」と「意識を失う前の私」とを異なるものと思わずに同じだと扱うから。

(4)　たとえ一時的に意識が失われても、「意識が戻った後の私」は「意識を失う前の私」を記憶している。意識を失う間でも記憶が残る結果、二つの私が同一人物に結びつけられるから。

(5)　私の身体が物質的に完全に入れ替わるためには、七年という長い時間を要する。そのため短時間私が意識を失っても、「意識を失う前の私」と「意識が戻った後の私」がほとんど変わらないと見なせるから。

問四　波線部Ⓒ「自分は諸行無常の『諸行』のほうだと気づく」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の⑴～⑸から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

⑴　意識が創る社会の中では、自己同一性が優先し時間がたっても変わらない「同じ私」として自分は存在している。しかし、個人に戻れば、実体としての私はひたすら移り変わる存在であることに気づくということ。

⑵　実物は変化するけれども諸行無常という言葉は変わらないように、意識が創る社会の中では自己同一性が優先する。しかし、個人に戻れば、この世のすべてのものが、たえまなく変化していることに気づくということ。

⑶　社会的な約束事は、自己同一性が優先する「同じ私」が「無常」を取りまとめ「同じにする」ことによって成立する。しかし、個人に戻れば、実体としての私のほうが「諸行」であることに気づくということ。

⑷　社会的な約束事は、じつは「無常」でつねに移り変わる存在である。しかし、個人に戻れば、「同じ私」がひたすら入れ替わる「諸行」を取りまとめ「同じにする」はたらきを持っていることに気づくということ。

⑸　ヒトは意識が創る社会の中では、ひたすら移り変わる諸行無常の存在である。しかし、個人に戻れば、「同じにする」という機能によって時間がたっても変わらない「同じ私」だという自己同一性に気づくということ。

問五　波線部Ⓓ「世界を同じにしているのである。」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　諸行無常である直接の感覚印象を極力減らすことによって、周囲の環境を「不易」なものにしているということ。

(2)　感覚所与とそれに伴う意味を「制限」することによって、多くの都市で恒常的な環境が作り出されているということ。

(3)　意識のもたらす意味との「直結」に伴い、アナログ情報すら変化しない恒久的な世界になってきたということ。

(4)　安全性、利便性などの理由によって都市化が進み、世界中で規格化された都市環境が「構築」されているということ。

(5)　感覚所与に基づく多彩な情報を、一時的に意味と結びつけたあとで「削減」することによって、代わりばえのない世界が生まれるということ。

問六　波線部Ⓔ「情報としての私なのである。」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の⑴～⑸から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

⑴　銀行員は、私が鎌倉生まれの鎌倉育ちであると理解しているにもかかわらず、自己同一性と社会の摩擦を示す書類の提示を求めたということ。

⑵　銀行員は、私が本人であるとわかっているにもかかわらず、意識が創る言葉に対応した文書を求めたということ。

⑶　銀行員は、私であると知っているにもかかわらず、自らの存在を規定する社会的な約束事にしたがった対応を求めたということ。

⑷　銀行員は、私が広く社会的に認められた本人と理解しているにもかかわらず、社会契約の手続きへの事前の了解を求めたということ。

⑸　銀行員は、私が応分にこたえられないと知っているにもかかわらず、社会的な規則に準じることを求めたということ。

問七　波線部(F)「それが現在を拘束するときにだけ、過去も未来もただいま現在に顔を出す。」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　時空の概念は、ヒトの意識がその存在に気づいたことによるのであり、ただいま現在の目と耳を折り合わせた言葉によって、過去と未来の具体的な形を知るということ。

(2)　時空の概念は、偉い意識によるものであり、その意識が連続する過去と現在と未来をただいま現在から焦点化することで、私が制限された存在であると気づくということ。

(3)　時空の概念は、ヒトがそれにどう気づいたかを浮き彫りにし、同一性に関する哲学の考察対象ともなり、ただいま現在の時間は過去と未来を含むということ。

(4)　時空の概念は、ただいま現在の個人の生き方にかかわり、その意識が私を縛らない過去と未来は存在しないという現在性への理解を導くということ。

(5)　時空の概念は、意識によって発生したが、確実な時はただいま現在だけであり、過去や未来の双方が現在の私を規定することによって、それは成立するということ。

問八　二重傍線部(1)「雑音の集合であることに気づく」とある。それはどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

問九　二重傍線部(2)「情報とはすなわち意味でもある」とある。それはどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

問題Ⅲ　「意識」と「情報」と「社会」の三つの言葉を必ず用いて、三〇〇字以内で本文の要点をまとめなさい。なお、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。（配点25点）

（下書き用紙）

5

10

15

20

300　200　100

（下書き用紙）

300　200　100